

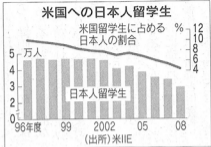
週目点



早稲田大学教授
川本 裕子

南アフリカで開催中のサッカー・ワールドカップ(W杯)が11日、決勝を迎える。地区予選初戦から約3年間に及ぶ戦いの頂点が決まる。W杯は約200カ国で放映され、視聴者は延べ約300億人にと上るといふ世界最大規模のイベント。決勝だけでも数億人が観戦するとみられ、勝負の行方のほかにも経済効果などに注目が集まる。

今回のW杯は初のアフリカ開催で、アジアから日韓が16強に進み、グローバル化を感じさせた。日本の快進撃は国内を包む閉塞(へいそく)感を破ってくれた。岡田武史監



▶サッカーW杯決勝(11日)

日本に足りない海外経験

督は大会前に「若者が本当に頑張れるところを見せたい」と話していた。覇気がないと批判されがちな日本の若人がタフな精神力で我が国のサッカー史を塗り替え、世界を驚かせたのは痛快だった。

一方で日本がさらに上位を目指すには、海外で活躍する日本人選手をもっと増やす必要がある。W杯出場32カ国のうち、プレー水準の高い欧州リーグに所属する選手数は、北朝鮮を除き日本が最少だ。Jリーグの選手が多く、これは国内に安住する日本人や企業の姿勢とも重なる。

日本人の海外留学生は2005年から減少が続いている。米国への留学生は3万人を割り込み、韓国人の半分以上に落ち込んだ。これは企業や大学などが海外経験のある人材を十分に生かしてこなかったことも背景にある。今後も厳しくなるグローバル競争を生き抜くには、国際的ビジネス感覚や能力を身につけた人材をいかに育て、本気で活用するかが課題となる。